

手をつなぐ

2021
5月
[No.783]

特集

創作と表現を、もっと



今月の問題 進んでいますか？ 地域生活支援拠点の整備

ひびき yu-ka (シンガーソングライター)

自分の声

長崎市手をつなぐ育成会

本人部会FICS

山崎良

お兄さんの声とお姉さんの声は

やさしい声

楽しくしてくれる世話人の声は

えがおになる声

大橋の人の声は

相談したくなる声

さんらいず移行の みんなの声は

お話をする声



ながさきしよくせいかい
長崎市育成会のしよくいんの声は

かんしゃの声

ながさきけんいくせいかい
長崎県育成会のしよくいんの声は

ありがとうの声

じぶんとも
自分の友だちの声は

なぐさめてくれる声

ぼくは みんながささえてくれる声に

ありがとうの気持ち

たのこえ
楽しい声 うれしい声は

やっぱり かんしゃです。



「わたしたちも言いたい」ではみなさまからの^{たよ}お便りを^{ほしゅう}募集しています（宛先は44ページ）。
^{せいかつ}生活のこと、^{しごと}仕事のこと、^{くらし}暮らしのことなど^{かん}ふだん感じていることを^か書いて^{おく}お送りください。

- 家族のかたち 1
 わたしたちも言いたい 自分の声 山崎良 2
 毎日すったもんだ [第53回] わが家の流行語? 4

特集 創作と表現をもっと 6

- 一緒に見る、一緒にいる 川内有緒 7
 支援センターの役割と取り組み
 地域での活動を振興する 鈴木京子 10
 日常の中に、新たな価値を 土屋明之 12
 身近な人の表現を丁寧に見つめる社会へ 柴崎由美子 14
 画面越しで見る「アート」のつながる力 ライラ・カセム 16
 誰もがどこでも表現者になれる 佐藤麻衣子 18
 「なんでそんなん」な日々 中野厚志 20
 伝統工芸と福祉現場から生まれるものづくりの相互発展 森下静香 22
 障害のある人の文化芸術活動の推進にむけて 大塚千枝 24

今月の問題

- 進んでいますか? 地域生活支援拠点の整備 26
 ひびき
 発達障害をオリジナルソングで応援 yu-ka 30
 ニュースのじかん 33
 暮らしを支える福祉の制度 第10回
 知的障害のある人の住まい その8 34
 ことばの浜辺
 街に埋もれた現実 池内陽彦 37
 中央の動き
 第105回社会保障審議会障害者部会が開催されました (その2) 40
 みんなで応援しよう! 東京2020パラリンピック 第12回
 世界の頂点めざして、スマッシュ! 45
 みないきぬこのしあわせごはん いち、にっ、さん! [lesson61]
 納豆をおいしく食べやすく! 46
 ちいきのいいもの 第20回
 シルクのマスクカバー 京都西陣会 西陣工房 48

表紙絵作者のプロフィール

- 森本進一 (もりもと・しんいち) 34歳 ■宮崎県国富町 知的障害者総合福祉施設 向陽の里 ■タイトル 竹の子
 ■ひとこと 絵が選ばれてうれしいです。皆それぞれ違うから、自分にしかできないものを大事にしたいです。



創作と表現を、もっと

コロナ禍で外出の機会が減ったことで屋内の活動が見直され、ものづくりや創作活動に触れる知的障害のある人も増えています。自宅で、オンラインでと、創作の場や表現手段が幅広くなったこともこうした動きを後押ししています。より多くの知的障害のある人がアートに触れ、より多様なチャンネルで発信していくことは、多様性のある社会をつくっていくためにも重要と考え、知的障害のある人が表現活動に携わる機会を広げる活動に着目しました。魅力にあふれるユニークな表現は、意外と身近にあるのかもしれません。



かわうち・ありお
ノンフィクション作家。アメリカ、フランス、
日本を転々としながら12年間国際協力分野
で働いた後に、フリーランスの物書きに。
東京を拠点に評伝、旅行記、エッセイなど
を執筆し、著作に『パリでメシを食う。』『空
をゆく巨人』ほか。

一緒に見る、一緒にいる

川内有緒

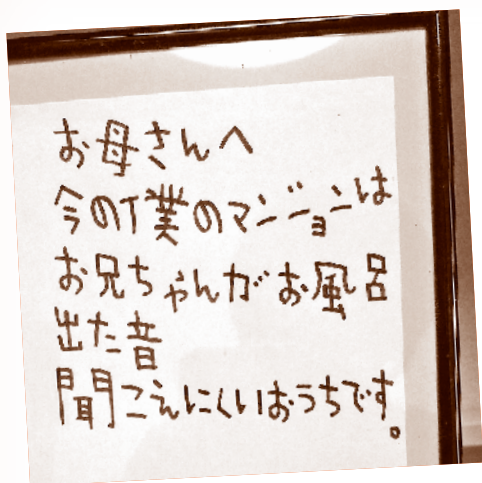
そのひとは今年の桜を見ることができない。いや、去年もその前も、桜だけじゃなくてコップとか鳥とか、ありとあらゆるものを見ることができない。そのひとは生まれつき弱視で、小学生のときに光以外を失い、二十歳をすぎたころには光も見えなくなった。

そのひとと一緒に美術館にめぐらようになって二年以上が経つ。わたしは、目で見たものをひとつずつ説明する。そのひとが質問をする。また見て、考え、また話す。作品の形や色からはじまって、そこから受けた印象や思い出もしゃべる。わたしたちはどうでもいいことでよく笑う。

一緒に美術館を歩いていると、まるでお互いの体がお互いの補助装置になったみたいだ。わたしは作品について話す装置。そのひとは作品に対する発見や考えを深めてくれる装置である。ふたつの装置は連動して動いている。

「見る」ことが簡単な作品もあれば、そうではないものもある。具体的な物体や風景なんかは説明しやすいけれど、コラージュとか抽象的な彫刻とかは難しい。わたしは決して語彙力が多くない。だからいつも「すごく大きいのが、丸っこい形で、びっくりした！」みたいになってしまう。ピカソもお手上げだった。あれを説明するなんて自分にはインポシブル。そういうときはさっさと次に進む。

ある夏の終わり、奈良に仏像を見にいこうということになり、友人と三人でビジネスホテルに泊まった。その朝、わたしはザーザーという流水音で目が覚めた。部屋の中は



真つ暗で、隣の部屋のひとが早朝にシャワーを浴びてるんだな、ずいぶん壁が薄いね、と思いつつまた眠りについた。次に目が覚めると、そのひとはもう着替えていた。

「あれ、早かったね。ていうか、もしかして朝シャワーを浴びてた？」

「うん」

「え、あんな真つ暗な中でも大丈夫なのか、そっか」と言うのと、「うん、便利でしょ！」と笑った。

新潟の大地の芸術祭では、『夢の家』という巨大な作品も見た。古民家がまるごと作品で、宿泊することもできる。わたしたちは指定されたヘンテコな繋ぎを着て、棺みたいなベッドで一夜を明かし、朝になると見た夢の話をした。ちなみに、そのひとの夢には具体的な物体の形や色といったビジョンは現れないという。はちゃめちゃな展開でわたしたちを驚かせる夢といえども、そのへんはあくまで現実の延長にあるらしい。

時間があるとき、そのひとはパソコンの読み上げ音声で小説を読む。音声はものすごいスピードで流れていき、一緒に聴いていると異空間にワープしたみたいだ。ある日、なにを読んでいるの、と聞いたら「栗本薫の小説」と答えた。栗本薫はわたしも好きだったから耳を澄ませてみるのだけれど、やっぱりなにも聞き取れない。

すごいなあ、おもしろいなあ、と思うわけだが、いちいち驚く自分ってどうなのか、とも思う。そのひとにとって、猛スピードの音声を聞きわけることも、暗闇で歩くこ

